

1 佛教大学附属こども園の教育目標

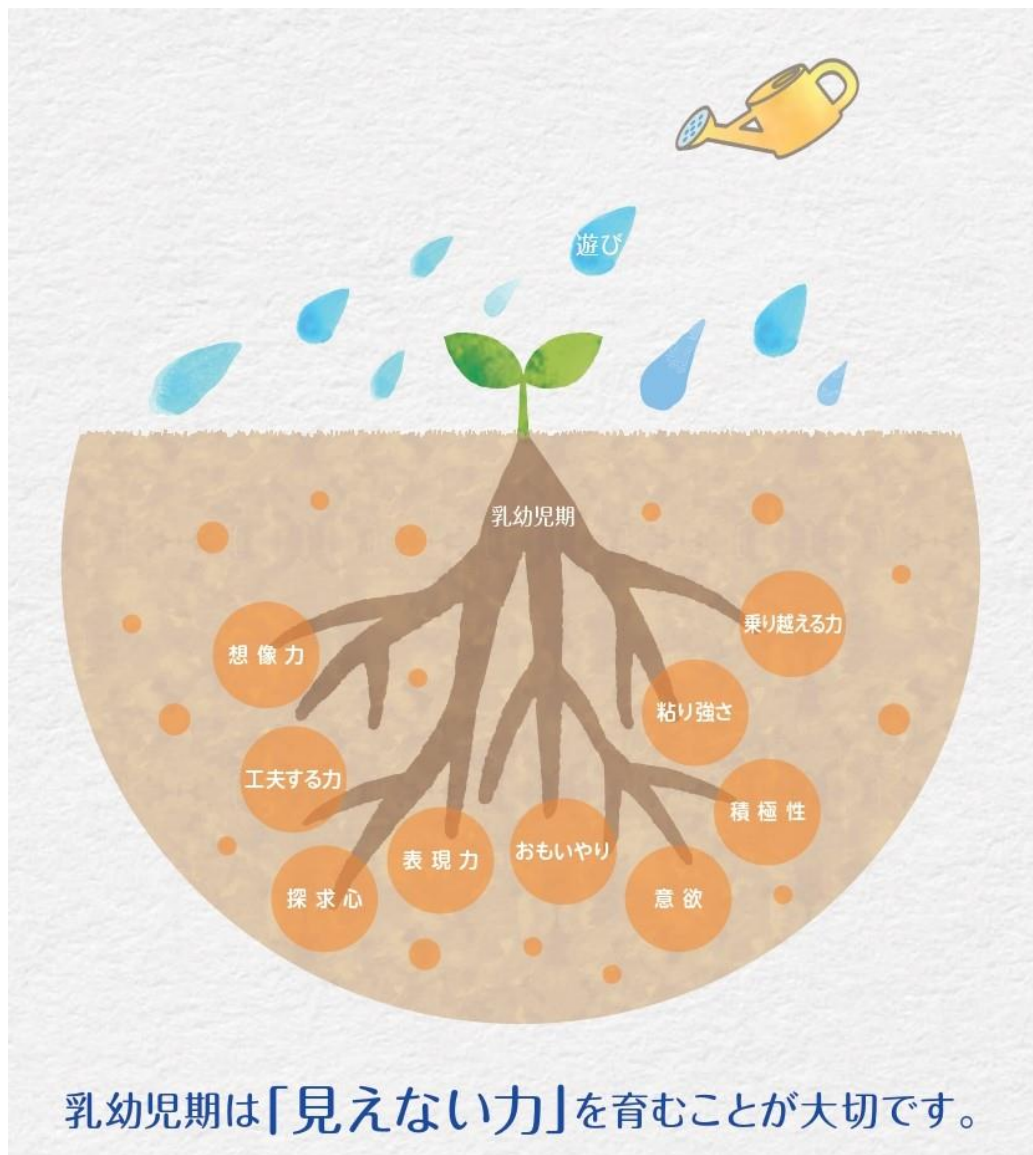
佛教大学附属こども園は、嵯峨広沢の自然と歴史に恵まれた美しい静かな環境の中で幼児の心身の発達を助長するとともに、仏教精神による情操豊かな人間を育成することを目的として、日々の保育を行っています。1976 年（昭和 51 年）の佛教大学附属幼稚園創立から 48 年が経過し、幼児教育・子育て支援の場として地域社会にも貢献していくことを志しています。

教育目標を「仏教精神に基づく情操豊かな子ども」「健康で意欲的に活動する子ども」「身近な環境に関わり創造する子ども」の育成としています。重点目標を、仏教精神、特に法然上人のみ教えに基づき、行事・作法を通し生命を尊重する豊かな心を培うとし、一人ひとりを大切にしながら子どもたちの**自己肯定感**を育てています。

乳幼児期に育てることが必要と言われる「**非認知能力**」の中でも、自ら取り組む喜びを感じる「**主体性**」、ともに生きる喜びを感じる「**協働性**」を育むことに主眼を置き、それらを**自然の中で自ら心を動かして遊ぶこと、友だちと体を十分に動かして遊ぶこと**などを通して育みたいと願っています。

2 本年度に重点的に取り組んだ具体的な計画や目標

- 幼保連携型認定こども園教育保育要領理解に基づく「全体的な計画」・「指導計画」の作成
- 安全対策の推進
- 子育て支援の推進



3 評価項目

評価項目	取り組み状況
1 全体的な計画・指導計画の充実 (a) 本園の全体的な計画・指導計画の作成。 (b) 一人ひとりの子ども理解に努め、乳児から幼児にかけての発達を理解する。 (c) 全体的な計画・指導計画に基づき、子どもの姿に応じて、行事や保育の内容を再構築する。	・各学年ともに、月始にねらいを設定し、月末に乳幼児の姿から環境構成や援助の在り方・ねらいを見直した。引き続き、幼保連携型認定こども園教育保育要領で重点が置かれている社会情動的スキル（非認知能力）への理解を深め、指導計画のねらいがその育成につながるものとなっているか確認した。 ・0歳から2歳児に関しては個別の支援計画を立て、一人ひとりの発達を踏まえ、月ごとの目標を持ち、援助や環境構成の在り方を検討した。 ・ドキュメンテーションやポートフォリオを作成し、保育者間でそれらを持ち寄り、子どもの内面理解についてそれぞれの考えを出し合い、子ども理解を深めた。 ・全体的な計画・指導計画をもとに行事や保育の内容を見直し、子どもたちの心の育ちにつながっているのか考察した。また、その行事を経験することによって何を育てているのか保育教諭間で共通理解したうえで、保護者理解を図った。その内容をR6年度行事予定にも反映する。
2 安全対策 (a) 乳幼児の安全を確保する観点から、迅速に園内環境の修理・修繕にあたる。 (b) 0～5歳児が安心・安全に園生活を送ることができるよう、施設整備・点検を行う。 (c) 子どもの健康面に係る対応について教職員間で共通理解を図る。	・乳児の受け入れにあたり、園庭・保育室環境を見直し、安全に保育を運営できているかどうか確認し、必要箇所は早急に備品等を購入し、環境の再構築を図った。 ・担当を決め、定期的に遊具・園舎全体の点検を行った。老朽化等対応必要箇所については、大学の関係部所と調整し、昨年度に引き続き、修繕を行った。 ・子どもの投棄については、医師の指示書提出を義務付け、安全に投棄することができるよう体制を整えた。また、食物アレルギーへの対応が必要な子どもについては、医師の診断をもって対応を要することを徹底し、対応策が必要な子どもが明確になるようにした。
3 子育て支援 (a) 園行事やクラス別懇談会において、「大切にしたい育ち」について保育教諭と保護者が共通理解を図ることのできる機会を設ける。 (b) 子育て講演会・子育てサロン・子育てトーク等、保育教諭と保護者がともに語り合うことのできる機会を設ける	・園行事・クラス別懇談会などでは、各学年における「大切にしている育ち」を伝えるようにした。 子どもの心の育ちを共有できるよう、保育者が保育中のエピソードを紹介した。 ・れんらくアプリで保育のドキュメンテーションを配信したことは、大切にしている育ちや保育者の関わり方や願いを各家庭に伝える機会となった。 ・子育て講演会や育友会主催のワークショップ等は開催したものの、互いに子育ての悩みなどを話し合うことのできる子育てトーク等の実施ができなかった点は今後の課題である。

4、評価の具体的な目標や計画の総合的な評価

幼保連携型認定こども園に移行し、乳児や2号3号子どもの受け入れ、給食の開始など、保育のハード面を中心に大きな変更点があった。しかし、幼稚園時からの「大切にしたい育ち」はそのまま踏襲し、常に子ども内面の育ちに目を向け、「心の教育」の実践に取り組んだ。アンケートの結果から、保護者の方は、子どもたちの心の育ちを概ね実感している。

幼保連携型認定こども園に移行し、「幼保連携型認定こども園教育保育要領」を基盤に乳幼児保育に取り組むこととなり、幼稚園の「教育課程」を「全体的な計画」に移行し、月の指導計画においても「全体的な計画」をもとに再構成した。今年度は新型コロナウイルス感染症が2類から5類に引き下げられたが、保育内容や行事

などを緩和対策としてだけでなく、乳幼児期教育の意義を踏まえて改めて見直し、子どもの将来にわたって社会を生き抜いていくための心の育ちにつながっているかどうか検討した。乳幼児期に主体的にモノやヒトに関わることの大切さを鑑み、保育教諭は自ら心を動かして取り組みたくなるような環境構成に取り組んだ。また、各年齢に応じて人と関わる力の育ちにつながるよう、子ども同士の関わり合いが生まれ継続するような援助を意識した。

乳児の発達については日々の保育の中で子どもの姿から学ぶところが大きい。今後も、日々の保育者同士の交流や研修などから、育児担当制や環境の校正など、0～2 歳児の育ちに見合った保育の在り方を考察していくこととする。

そして、懇談会やアプリでドキュメンテーションを掲示し、子どもの具体的なエピソードを伝え、どんな場面で子どもの心が動き、育っていくのかを発信し、共有できる機会をつくったことが、保育内容の共有や子どもの内面の育ちの実感に結びついたのではないかと考える。

安全対策においては、各地で震度 5 以上の地震が発生していることを受け、有事の際に子どもの安全を第一に迅速に対応できる多様な側面からの具体策を構築する必要がある。

子育て支援においては、コロナ禍において保護者同士がつながることが難しい状況が続いていた。令和 5 年度は、子育て講演会、子育てサロン、育友会活動において場を共有しながら保護者同士がつながる機会を持てたことは保護者が安心して子育てできるための一助となったのではないかと考える。

令和 6 年度は、幼保連携型認定こども園に移行し 2 年目を迎える。保育だけでなく、子育て支援においても時代や地域のニーズに合った運営方法を確立していくべく、その内容について見直しを図りたいと考えている。その際、多様化していく複雑な社会を周囲の人と協働しながら、自ら問題を解決しようと学び抜くことのできる育ちを目指し、じっくりと一人ひとりを見つめながら保育にあたる

5、今後取り組むべき内容

課題	具体的な取り組み方法
全体的な計画・指導計画の作成	・幼保連携型認定こども園移行に際し、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づき、全体的な計画・指導計画の見直しを図る。 ・乳児の発達について学びを深め、教職員間で共通理解を図り、指導計画に反映させていく。
安全対策	・乳幼児の安全・健康を確保する観点から、修理・修繕必要箇所は迅速に対応する。 ・有事の際に即対応できるように激甚災害を想定しながら、訓練にあたる。 ・子どもの事故や不審者の侵入に対応できるように、想定訓練に取り組む。 ・子どもへの投薬や給食のアレルギー対応など管理マニュアルに基づいて正しく対応できるように、マニュアルの見直しにあたる。
子育て支援の充実	・育友会事業を生かしながら、保護者同士がともに語り合うことのできる機会を作る。園と家庭が「乳幼児期に大切にしたい育ち」について共通理解を図り、園と家庭が同じ方向性を持ち子育てに取り組むことができるような支援を行う。

6、施設関係者の評価

「仏教精神に基づく情操豊かな子ども」「健康で意欲的に活動する子ども」「身近な環境に関わり創造する子ども」の育成を教育目標として、総合的な努力をしていると高く評価できる。以下、評価項目ごとに述べる。

「1. 全体的な計画・指導計画の充実」に関しては、一人ひとりの発達段階をふまえてねらいを設定し、保育者間で共有しながら子ども理解を深める取り組みをされていると高く評価できる。

「2. 安全対策」に関しては、幼保連携型認定こども園に移行したことによる環境再整備が適切に行われていると評価できる。

「3. 子育て支援」に関しては、クラス別懇談会の実施、れんらくアプリの活用など、子育て支援の充実を図っていることが高く評価できる。

今後の課題としては、幼保連携型認定こども園へ移行したことによって生じる変化や出来事に柔軟に対応していくことが挙げられるだろう。

《佛教大学教育学部准教授》

子供の心の育ちに重点をおいた指導計画を行い、保育教諭達が共通の信念を持ち保育にあたる様子が見え、安心して預けることが出来ました。子供達が自発的・主体的に行動するための環境づくりや保育教諭からの声かけがされています。

保護者に対しても、保育教諭が研修や実践で得た知識や経験を懇談会や行事ごとに教えて下さり、またアプリでも年齢ごとの取り組みや子供の育ちを配信いただき、家庭でも子達に同じ眼差しをむけることができました。

園庭は広々と自然あふれる仕様に整備され、季節ごとに移り行く自然のなかで健やかな心と、健康な身体を育む環境が用意されています。

コロナ禍を経て、またこども園に移行したこともあり、各年齢ごとの子供たちの育ちに寄り添う形で行事のあり方が見直されています。

行事の意図やそれによって育まれる学びを、懇談会や説明会にて、なおいっそう保護者に周知されることを望みます。

《保護者代表》